

語り継ごう、 戦時中のできごと

終戦から60年が経過しました。悪夢にも似た戦争の惨禍を、直接肌で知らない世代が占める今日。物があふれ、不自由のない毎日の平穏な生活に慣れた私たちは、悲惨だった戦争体験やその傷跡を忘れつつあります。この戦争体験を風化させず、困難を乗り越え、耐え忍び、つらい厳しい思いをして生きぬいてきた、なまなましい体験を次の世代に語り継ぐことは今だからこそ必要なことだと思います。

ささ こ きぬ こ

やまおかかずひろ

笹古絰子さんと山岡和弘さんから貴重な体験記をいただきました。

私の家は、父親が早くに亡くなりましたので、母と姉と妹の4人で駒ヶ根で生活をしていました。小学校1年生から、農家の子ども達は自分の家の手伝いをします。私の家は非農家でしたが、農繁期には非農家の家の子ども達も、農家へみんなでお手伝いに行かれました。田植え、草取り等毎日が忙しく遊んでいる時間がありませんでした。5・6年生が引率して連れていきますが、低学年は遊びたいさかりのため、嫌がって泣く子が多く、なだめながら連れて行くことも苦労しました。そうやって学校の休みの間中、非農家の子ども達は毎日、違う農家に手伝いに行っていました。農家の作業は、田植え、稲刈り、草取りの他に桑の木を剥いで服を作るための、



笹古 絰子 さん

繊維作りもやりました。桑の葉でお蚕も飼いました。大人のする仕事をみんなやっていました。農家の男は兵隊に行っていたいないため銃後の守りといって子ども達がみんな協力して母親や年寄りの手伝いをしていました。田植えは手

ほどきを受けながらするのですが、やっとな植えたと思ったら苗がみんな浮いてきてしまいました。それでも人手が足りないのです子ども達の手が必要でした。

唯一の楽しみは、食事の時に出る農家で作ってくれた大きな、きな粉のおにぎりでした。ご飯が食べられるので本当に楽しみでした。

泊りがけで行った子守

学校では、男の先生も召集されたため、教師は女性が多く19・20歳の代用教員でした。しかし、先生の指示には絶対に従わないといけませんでした。

春の農繁期に、先生が「この中の一人に泊まりがけで一軒の農家へ子守に行ってほしい」と言われ



昭和20年の卒業記念の写真
(下から2段目右から2番目)

ました。希望者を募ったのですが誰も返事をしませんでした。そこで高学年だった私に白羽の矢が立ち、私が子守に行くことになってしまいました。いざ、行ってみると、電気も通っていないランプ生活の家でした。そこで、就学前の男の子3人の面倒をみることになっていました。とにかく忙しい家で、両親は朝日が昇ると田んぼに出てしまい、昼休みまで帰ってきませんでした。私一人で3人の子に怪我等をさせないように見ていないといけませんでした。昼休みになると、家の人達は昼寝をしていましたが、私はみんなが寝

ている間に学校からの宿題をやっていました。そして昼休みが終わると、両親はまた田んぼに出てしまい手元が見えなくなる頃になると帰ってきました。そんな生活をしていましたので、私に一番負担がかかっていました。

その家では、土間で家畜を飼っていましたので、ハエ等の虫が多く、夜になると蚊が多くて大変でした。苦労が多かったのですが、どうにか責任を果たして帰ってきました。

そして、秋の稲刈りの時期になったら、再び学校に要請がきました。春にきてくれたお姉ちゃんにお願いしたいと言われ、誰かが行かないと先生も困るのだろうと思い引き受けました。思っていた以上に大変でしたが、帰る時には「本当にありがとう」と言われ、やっぱり来てよかったなあと思いました。春も秋も一週間の泊りがけで行ってきました。

学校での生活

普段の授業の日は、作業ばかりしていて勉強をするのはほとんどありませんでした。山から丸太を運んできてストーブ

の新作りもしました。男の大人がいないため学生自身が全てをやっていました。

授業を受ける時には、教科書に記載されている日本の歴史に関する読んではいけない箇所、硯で黒い線を引いて全て消しました。そして端から読まされるのですが、修正箇所が多くて飛び飛びで内容が全然わからなくて困りました。

また、食べ物がないで苦勞しました。お米の配給もありませんでした。家では雑草等の食べられる草を雑炊にして食べていましたので、学校にお弁当を持つていくことができませんでした。農家の家の子はお米があったのでお弁当を食べていましたが、非農家の子はお昼時間になると屋上に行つて、授業が始まる頃に教室に戻り、お弁当を食べたふりをしていました。

また、一週間に一度道端に生えている草をみんなで集めて学校に溜めておきました。私達が食べられる物ではないのですが、それを粉にしてパンを作る材料としていました。

一番苦勞したお母さん

今思えば、母親達が一番大変だったと思います。父親が不在で、何も無いところから育ち盛りの子ども達を養わなければならぬので、本当に苦勞したと思います。私の家では母が少し野菜を作っていました。ご飯がある時は母が野菜を食べて、子ども達にはご飯を食べさせてくれました。「お母さんが自分の食べるご飯を私達に食べさせてくれるので、私達は助かります」と作文に書いたことがありますが、母には何を言っているのと笑われました。しかし、本当に、自分が食べなくても子ども達には食べさせたいという気持ちの母親が多かったと思います。



昭和20年姉妹といこの記念写真
(上段右から2番目)

は助かります」と作文に書いたことがありますが、母には何を言っているのと笑われました。しかし、本当に、自分が食べなくても子ども達には食べさせたいという気持ちの母親が多かったと思います。

現在、靖国神社の参拝のことが問題になっていますが、私達の年代は、戦争をやっていた時代ですから国民がみんな同じ気持ちでいました。お国のためにと純粋な気持ちで大勢の兵隊さん達が亡くなられていきました。靖国神社に奉られていた兵隊さん達の魂に感謝の気持ちを込めて慰霊したいと思います。

シベリアの メーデー

中部シベリアのチェレンホーボは石炭の町である。八里四方一帯が品質最高の無煙炭が無尽蔵と言うぐらいに埋まっているとのこと驚きである。

昭和20年8月15日、我々は満州奉天（瀋陽）で敗戦し武装解除となる。軍人はウラジオストックより日本に帰国とのことで、黒龍江（アムール河）を水車船でソ連に入る。シベリア鉄道を20両の貨車で輸送されるが、朝の日の出で日本と反対の西へ西へと列車の走るには捕虜の身、如何ともし難い。数日後、海を思わせるバイカル湖

に停車し顔を洗ったが、まさしく淡水であった。

更に西へ幾日かチェレンホーボの引き込み線より郊外の炭鉱のラーゲル（収容所）に到着し、全員が検査で私物をすっかり没収され、それこそ着の身着のままとなる。一律に支給されたのは毛布一枚と飯盒一個のみで捕虜の悲哀を味わう。到着したのは10月中旬で夜は寒かった。

ラーゲルは5重6重の有刺鉄線で囲まれ四隅に監視楼があり十数棟の半地下式の古い木造の長い建物寒々している。中には丸太造りの二段式のベッドが両側にある。真ん中は通路で中程には暖房用のペーチカがあった。ここは以前、流刑者の収容された所らしい。他に事務所と炊事場があるのみで、



山岡和弘さん

呆れたことに水道もトイレもない。早速と深さ4・5メートルの大きな長方形の穴を掘られ、上に木材を等間隔に渡して踏み板とした、囲いのない露天トイレである。みな相前後しての使用である。殊に冬期はすべてが凍る中で大

変であった。

水は最初はロシア兵が大きな水樽を馬車に乗せ運ぶが、炊事優先で個人の飲み水は甚だ少なかった（四千人近い収容人数）急遽離れた街より水道管の敷設堀が約2000メートルに亘り始まる。直線なので仕事が早い。

みな捕虜の労役である。

食事は、飯盒の蓋に一杯の満州よりの高梁（こうりやん）を糊状にした粥を一日三回。それに約100グラムの黒パン一個が一日分の全食糧であり、命を繋いだが常に空腹であった。

11月よりいよいよラポータ（仕事）が始まる。石炭の露天掘りだ。兵隊を30人で一組とし三組を編成。一組が八時間労働の交代で二十四時間作業が続く。一週間毎に夜間と昼が順送りである。採炭跡に残る幾本かのレールを跨いで行くと、高さ十数メートルの石炭が絶壁の如くなつて蜿蜒と連なっている。その一部分、長さ約30メートルの一画が作業場で、スコップと鶴嘴（つるはし）で石炭を下に掘落とす。地表では幅80センチ位の分厚いゴムのコンベアーが左に動き石炭が運ばれる。その左側から今度は直角に前方に傾斜しながら登るコンベアーに移り、20メートル位進むと停車中の



昭和15年5月の山岡さん

60トン貨車に投入される仕掛けた。その接点には小さな小屋があり（マドリーチカと呼ぶ）ロシアのマダムが一人でその操作とコンベアーの電源スイッチを受け持ち、大きな身体で常に大声を張り上げている。炭層の中断より下側は所々サンドイッチ状に10センチ位のパロード（岩板）があり、取り除くのに苦労した。

仕事に手抜きがあると、コンベアーの石炭の流れの量で直ぐに分かる。常にマッセル（ソ連監督）が「ハラシヨ、ラポータ、ベストレー、ダワイダワイ（よい仕事をやれ）」と言いまくる。マッセルにも成績を上げる責任があるのだ。とにかく貨車一杯にするには30人では大変なノルマー（仕事量）だ。ノルマー以上の仕事を達成するとそれに応じ食事が増量されるそうだが、ついに一回たりとも達成することはできなかった。

冬期中は仕事の帰りに大きな一塊のウーゴリ（石炭）を各自持つことは暗黙に認められ、お陰で室内のペーチカの燃料にはこと欠かなかった。しかしシベリアは何としても寒い。特に夜間作業は氷点下20度から30度は当たり前。常に身体を動かさなければ凍るようじつとしていられない。毎日が辛く過酷な露天掘りである。石炭が幾らでもあるのに燃やせず、暖もとれぬのが捕虜の哀れさだ。

厳冬のシベリアにも春は訪れ、昭和21年5月1日はメーデーだ。日本のメーデーは労働者の祭典とし昭和10年頃制定され、会社を休み鉢巻にプラカードで市内を行進する写真の記事を思い出す。ロシアは労働者の国であるだけに、労働者の我々も当然休ませるだろうと期待していた。

いよいよ、当日になったが何の沙汰もないまま刻限が来る。どうも平常どおりの作業だ。期待外れで作業場に行くと少し様子がおかしい。いつもは入れ替えを含めて一台か二台の貨車が三台も連なっている。しかも炭層の上部にはドリルで開けた幾つもの穴にダイナマイトを仕掛け、導火線で着火を待たばかりだ。今日のメーデーは休みどころではなく、増産の体制のようだ。作業開始の午前8時とともに一斉爆破で上段部分の石炭が一瞬に破碎された。下のコンベ

アーはすっかり埋まってしまい重くて動かない。マッセルが慌てて「ヤポンスキー、ソルダーテエ、ウーゴリ、ブイストリー、ダバイダバイ（日本兵よ石炭を大急ぎで取り除けろ）」と盛んにまくしたてる。我々も懸命になり石炭を除ける。しばらくしてようやくコンベアーが動き出し、石炭がむくむくと運ばれ始め、一同ホッとすること。その日は一日中マッセルの叱咤督促の作業が続く、一同頑張ったつもりだが貨車3台はとても無理であった。マッセルはメーデーに合わせ採炭量が最高のノルマーを達成し、上層部に報告し士気を鼓舞したかったのだろう。その為我々の期待した5月1日のメーデーは過酷な仕事を強いられた結果となる。

そんな中、ラーゲル内の我が中隊には、岡谷市から西堀区の河口米男さん、間下区の武居武八さんと私の3人が、古参兵の下士官として各班ごとと同じ建物におり、三人一緒に岡谷ヘダモイ（帰国）を夢みてお互いに励まし合い頑張っていた。

毎日の辛い炭鉱労働も、2年目の厳冬期に入っていた。ある日のこと河口さんの調子が良くないとのことであったが、医療診察を受けることも無く、間もなく隣の2段ベッドの上で命を落としてしまう。余りに急な出来事で驚きととも

に悲嘆の極みであった。遠い異国の地で本人も日本の家族を思いさぞかし、残念で切ない事だったろう。明日の我が身を案じながらも武居さんが河口さんの飯盒を自分の飯盒と交換し、後にシベリアより持ち帰り、遺品として彼の実家に届け仏前にお供えしたが、それから既に半世紀余り経る現在である。

それにしても、河口さんの霊魂はシベリアの凍土に埋もれたままであの時からもう、58年の歳月を経過する。日ソ平和条約が早期に締結され、遺骨が一日でも早く故郷の岡谷に帰還するのを祈っている次第であります。

さて、武居さんとは昭和15年以来的の戦友であり、中国北支軍で対八路軍戦時代から、満州の対ソ連戦時代、敗戦後のソ連シベリア抑留時代と常に同じ中隊で共に生死の時を過ごして、なおシベリアからも一緒に岡谷へ無事帰れたことは誠に幸運であった。今でも時々顔を会わせ、当時を回想し懐かしみまた、悲惨な戦争は我々限りで、絶対繰り返してはならぬと語り合っている。そして、シベリアでの捕虜の労役は全てが何かの代償としてソ連に保留されたのであろうか。我々は一円だに支給されなかったなあと苦笑し合うのである。

私がシベリア抑留時代（昭和20年～昭和22年）に使用した飯盒は、

想い出として今も大切に保管してある。

シベリア抑留者への未払い賃金問題

旧ソ連は第二次世界大戦終戦後、国際法に違反して、日本兵約六十万人をシベリアを中心とする地域に連行し、過酷な強制労働に従事させました。日本政府は、南方地域で米英の捕虜になった日本兵に對しては、労働証明書にもとづき賃金を支払いました。しかし、ソ連政府は抑留者に労働証明書を発行せず、日本政府も支払わないまま推移し、この問題は「戦後処理問題」としても決着済み」としてきました。

ソ連崩壊後、ロシア政府は是正の措置をとり平成4年以降、労働証明書を発行するようになりました。しかし、日本政府からは慰労状と銀杯が送られましたが、賃金は支払われていません。



ロシア政府より山岡さんに送られた労働証明書